台湾サマープログラムの感想

工学院 牧俊介

今回このプログラムに参加した理由としては、親からの「留学に行け」という熱い勧めと海外で活動するのが趣味で一年の四分の一ぐらい日本にいない姉を見ているうちに自分も海外に行くことに興味を持ったからだ。とはいえ他のプログラムもあった中、何故台湾にしたかというと、正直に言うといきなり英語話者だらけの国に行くのはハードルが高かったので、身近で親日である台湾なら初海外には丁度良いのではないか、と思ったからというかなり打算的な理由もある。さらにお互い英語は第二外国語なので英語も聞き取りやすいだろうと思っていた。しかしこの予想は大きく裏切られることになるが、それは後の話。

プログラム参加して一番に思ったのが「年上ばかりだ」ということだ。一年次から参加出来るだけあって結構ビギナー向けなのかと思ったがそんなことは無かった。実際このプログラムは向こうの大学が主催するため、自分でやらなくてはいけないことが多く、人間力が問われる面も多かったと今になって思う。それはそうとして、自分の場合は日本でも台湾でも会話の鉄板ネタである専門の話になると一切ついていけず、自分から何か話すことも出来ず、かなり渋い思いをしたので、語れる学術系のジャンルを持ちたいと思った。

そろそろ日本を発った後のことを書いていこうと思う。出発までは経験豊富な姉に手伝ってもらったので何とかなったが、着いてから寮に行くのが中々地獄であった。まず海外用の SIM カードを買う際に早速自分の英語が伝わらないことに愕然とする。何とか買えたものの乗り込んだバスを間違える。そして台湾のバス制度をよく分かっていなかったため、easy card がエラーを起こし、運転手に何か言われたが、当然言葉が分からずなんやかんやあって降ろされる。その後 MRT の乗り方をその場で調べて MRT でなんとか最寄り駅に辿りつく。そしてシャトルバスを待とうとした…が、場所が分からずうろうろしていたら逃す。20 分待ちようやく乗り込み出発。次海外行くときは空港で誰かと待ち合わせしよう…。だが、言葉も通じない国で一人奮闘する経験は非常に良い経験になったと思う。(思うことにした。)

台湾の現地の人(学生ではなく)と交流して分かったことは、英語はかなりの確率で伝わらない。日本には「カタカナ英語」というものが存在するため、「ミルク」だったり「コーヒー」は伝わる。しかし、台湾にはそれが全くと言っていいほど無い。なので「ミルクを入れるかどうか」についても一切通じ合わないのである。さらに同じアジア系のため、日本人の我々に対しても普通に中国語で話しかけてくる(もし明らかに白人だったりすれば話は変わってくるだろう。)。そのことも会話をややこしくする原因になっていたと思う。

そして、ここで先ほどの話につながるが、このプログラムに参加していた学生に関しては本当にレベルが高い。英語が上手すぎて逆に聞き取れないことも多く、何度も聞き返してばかりいた。でも呆れずに何度も言い直してくれた〇〇さんには頭が上がらない。現地

の案内や店の人との会話もしてくれてもう本当にありがたかった。自分としても何とか答えたくて、焦って頑張って話そうとしたが、言葉が続かない。初年度担当に受けた「ペラペラ話さなくても、よく聞いて、少し考えて的を射るようなことを言えればいいよ。」というアドバイスを思い出し、頭で整理してから話すようにしたら多少話せたが、やはり不自然な間が生まれてしまうのが申し訳なかった。

向こうでの学習の事だが、多少リスニングは出来るので基本的には聞き取れた。だが、専門的なワードが出てきたときはかなり苦戦した。というか、ほとんど理解できなかった。特にプラズマの話は専門用語バリバリでかなり難しかった。企業訪問については、日本と台湾はお互いにいい商売相手のため、台湾人でも日本語を話せる人がいたのが驚いた。今回の学習で一番印象に残ったのは GARMIN で聞いた話であった。学生向けの英語での講演のような感じで経済の変化や将来の職業についての話であった、内容もさることながらプレゼンテーションの力が凄くて「タメ」や「ジョーク」のような聴衆を引き付けるような技術が盛りだくさんで、聞いていて非常に引き込まれたし、聞いた後自分の中で価値観のような何かが変ったような感覚を得た。他の人が下手だったと言うわけではないが、プレゼンテーション能力というものがいかに大事かを感じたのが今回の留学で学んだ一番大きなことであったと個人的には思う。

閑話休題で、台湾の観光について話したいと思う。今回滞在したのは台北なので、観光の場所も台北周辺となった。西門、台北 101、台湾地下街、九份、夜市、etc…。様々な所に行ったが、一番西門が面白かった。日本でいう渋谷と新宿を合わせたような、「the 若者の街」という様相で面白かった。西門を舞台とした「Dusk Diver」というアクションゲームが製作されるほどだ。しかし渋谷新宿に慣れてしまっているため如何せん狭いと感じてしまうのは少しある。だが、路上パフォーマンスや沢山の個性豊かな出店など日本ではあまり見ない光景も見ることが多く、少し不思議な空間に来た気がして楽しかった。

まとめに入ると、日本と台湾は共通点もあるが、違うところもあり、「あれ？ここ日本か？いや違うな」という面白い経験を何度もした。異文化と裸で向き合うような経験が出来た事は非常によいことだと思う。しかし、自分がもっと英語を話せれば…と思うことが多かったのも事実だ。英語で話そうとするとどうしても自信や勇気が出なかったりする。この大学生活で、英語で人と議論するような経験はたくさんあると思うのでその機を逃さず、特訓して、最終的に英語で良いプレゼンテーションが出来るようになりたいと思った。